

## モダニズム詩と十五年戦争 ▲講演大略▽

高 橋 新 太 郎

表題の「十五年戦争」という呼称は、第二次世界大戦の序曲となつた一九三一年九月一八日の「溝州事変」に始まり、翌三二年一月二八日の「上海事變」を経て三七年七月七日の「支那事變」と呼んだ宣戰布告抜きの中國との全面戦争、さらに一九四一年十一月八日に米・英に向けて宣戰布告した「大東亜戦争」、そして一九四五八年十五日の敗戦、この十五年にわたる戦争の時代を、いうわけですが、それを中国との戦争の部分と、米英その他の國々との戦争の部分とに分けて考えようとする見方に反対して、一つながらの戦争としてとらえるべきであるとした鶴見俊輔創唱のよび名に従つたものです。これは、例えば、東京美術学校を卒業して支那事變に応召し四一年十一月からの香港攻略戦に加わった一兵士の戦地での実感とも結び合う。石田一郎上等兵は、四二年に次のような感慨を記しています。「十一月八日を前後して変化したことは、支那事變の呼び名が大東亜戦争と變ると共に、白い埃に埋もれた道が灼けつくアスファルトの舗道に變つたことである。支那の泥土に馴染んだ兵隊たちの足は、やがて近代戦へ通ずるであらうこの固い道に行きなやみながら、わけもなく心身を擦りへらしてゐた。」(『戦中戦後私史――歴史の眷属』、刀水書房一九八四)

私は一九三二年の生まれで、十五年戦争の中でこの世に生をうけ育まれた世代で、兵士としての体験はありませんが、お國の為めにいさきよく死ぬことを次第に納得して行つた軍國少年の一人でした。私はまた、雑誌『疎開派』を発刊し、『疎開の思想――銃後の小さな魂は何を見たか』(潮新書、一九七二)を著わした、ゆりはじめと同じ『学童疎開

開』の世代の一員でした。アメリカの空爆から都市の国民学校初等科児童の生命を守るためにとられた措置であると共に、予備戦闘員の保護育成の手段でもあつたのでした。

「空襲があるかも知れんので 爆弾の落

ちてこん田舎へ行くんや。

疎開というんやが

親類のある者縁故疎開

学校ごと行くのが集団疎開

先生が説明してくれたが  
そんなことより母のことばが決定的だった“家に残っても よいそうやけど 田舎へ行つたら御飯が食べられるやろ”

一九三七年に京都府の軍港舞鶴市に生まれ育つた一實詩集『学童疎開』(文理閣 一九八二)の一節です。一九四四年八月に集団疎開が始まり、東京のほか一二都市で実施されたのでした。いわゆる疎開世代の体験は、ほゞ戦後二〇年の歳月を経て、文学作品に形象化されています。高井有一『北の河』柏原兵三『長い道』には、他所者としての縁故疎開者のいじめと屈辱の日々が綴られ、小林信彦『冬の神話』高井有一『少年たちの戦場』には、腕力と世故に長げた小悪魔たちが跳梁するボス支配の集団生活が描かれていますし、宮原昭夫は『ごったがえしの時点』で、家庭の事情や病弱その他の理由で都市に残された少數派である殘留組の心情の劇を記録しています。

一九四五年の一月下旬に、集団疎開先の福島県の三春から旧制中学進学のため東京に戻つたその日から私達は、早速B29の洗礼を受けることになります。毎晩の空襲は、着の身のまま眠る習慣を身につけさせ、三月十日には、下町一帯が焦土と化し、五月二十五日の山の手の空襲で私の一家も焼け出されます。数年前に四十年の歳月を隔てて会つた

小学校同窓の幸子さんは、数少ない残組の一人でした。病床の母親と幼い妹、家庭の事情で残ざるを得なかつたのでした。さいわい、幸子さんの家は焼かれずに済んだのでしたが、焼け残った家々に警察から各戸一名当て焼跡整理のため、出頭せよという隣組へのお達しがあり、数え年十三歳の小学校を出たばかりの彼女は、止むなく妹を背中にしばりつけて大人にまじって出掛け行きます。待ちうけていたのは、異臭を放つ焼死体を集めてトラックに乗せる仕事だったので。戦時中の標語に「総力戦に銃後なし」というのがありました。無残というか、むごいというか、幸子さんにとって、日常の暮らしの場は、まさに戦いの場でもあつたでしょう。

前置きが長くなりましたが、私の戦争へのこだわり、私がどのようなスタンスで戦争の時代を相対化しようとしているかということ、そして花田清輝に『さまざまな戦後』という著がありますが、ここにおいての大半の若い世代の方々に、さまざまな戦争の諸相があることを知っていたことが、私のこれから話の前提として必要だとの判断によるものです。

モダニズムあるいはモダニズム詩という名称についてもいろいろ議論がありますが、ここでは、第一次世界大戦後に顯著になつた立体派・未来派・ダダイズム・シュルレアリズム・表現主義・アブストラクトなど、既成の芸術に反逆して、因習的なもの、常識的なものを打ち破ろうとするヨーロッパの革新的な芸術運動の刺戟のもとに、「無詩学時代」と春山行夫が呼んだ從来の自然発生的な情感詩と異なり、主知的な方法論的自覚を鮮明にした詩、主として『詩と詩論』とその周辺の詩人達、安西冬衛・北川冬彦・北園克衛・西脇順三郎・村野四郎といった人達の詩を念頭においております。

学校の教科書などにもよく取り上げられている、よく御存じの短詩

春

てふてふが一匹  
鞆朝海峡を渡つて行つた。

で、安西冬衛の名を記憶されていると思います。第一詩集『軍艦茉莉』（一九一九）に収められた作品です。茫茫たる海原を渡る一羽の可憐な蝶のけなげな姿、その背後には東洋的ロマンを胎むダッタンの國。微小な昆虫と広大な空間のコントラスト、俳句的伝統を生かして小宇宙を提示したイメージの鮮やかさ。私のような戦争育ちの者にとっては、そこに当時の日本の大陸進出政策を重ね合わせて読むことも可能です。

### 燕とアスファルト

南方共榮圈から海を越えて燕が渡つて来る。

直として都郊を貫く新産業道路。戦時日本の生産拡充門を目指して間断なく走過するトラック群の排出するモビル油に濡れ、エキゾーストに刷<sup>は</sup>かれ、複式ソリッド・タイヤに磨かれて黒塗<sup>ペイント</sup>タ<sup>ムニ</sup>調帶の如く流れる鋪装路を、流線一過、颶<sup>ハラハラ</sup>と反轉する E · C · S。

正しく興亞の夏の哨戒機だ。

思へば紺の暖簾を出で入りする艶冶な風俗圖繪の伊達者から、時代はいつか彼をシート・アスファルトの流線路にアクセルを加へる近代のトレーナーに轉身させたのだ。

傳説に據れば、創め燕は佛陀の病篤<sup>ヒツク</sup>を報する途上、化粧に憂身をやつして使命を忘れた刑罰によつて、生涯蠅<sup>ムカシ</sup>を糧とする宿命を負はされたといふことだが、今や世代は移つて、舞臺は百八十度の大轉換を試み、古いこの説話の主に、錫、護謨、石油、ボーキサイトなど高度國防國家の建設に必須な資源の輸送路を警護する重大な任務を新しく課したのだ。

燕よ、心して汝の任務を果せ。

そして新しき時代の傳説を創造せよ。

艦艇船舶の要用の切にして急なる、  
蓋し今日に極まれり。

夫れ

神武東征の元、艦はを日向美々津の湊に繕し、  
崇神天皇の十七年七月朔、船舶を造らしむる詔はを下し賜へる、  
乃至は近く日清の風雲急ならんとするの旦、内廷の費を省き製艦の費に充てさせられ、  
今また帆柱用材御下賜の叡慮を仰ぐ、  
列聖夙に大御心を海防に用ひさせ給ふ御事概ね以て斯の如し  
孰んぞわれら詔を承り必ず謹みまつらざらんや。

須らく舉國財を捐て費を投じ

報效の臣節を建艦の一途に傾倒すべきなり。

艦艇船舶の天下の要用たる、

正に極まつて今日にあり。

詔を謹まんかな。

いずれも安西冬衛の詩です。日本詩人協会編『現代詩 昭和十六年秋季版』(河出書房、一九四一)と日本文学報国会・『辻詩集』(八紘社杉山書店、一九四三)に収載されたものです。日本文学報国会は、小説・劇文学・評論隨筆・詩・短歌・俳句・国文学・外国文学の八部会から成る戦争遂行のための翼賛団体で、『辻詩集』は海軍への献艦運動の一環として企画されたもの。

### 戰爭以來

佐伯都郎

あの丘の上から  
海が見える。

ある日 わたしは

雲烟遙かな水平線の彼方を  
堂々と行く艨艟を見た。

わたしは

グンカンダア、グンカンダア、

バンザイ、バンザイ

と連呼しながら 夢中で丘を走った。

戦争以來——。

わたしは戦果のあがる毎に

あの少年の日の感激を新にした

見敵必殺。

あゝ いまのこの瞬間でも

艨艟は敵を求めて波を蹴立てゝゐる。

われらは應へねばならぬ。

われらの日本帝國に最後の捷利をもたらすために。

一本の針なりとも擣げつくして。

いまだ還らず・  
いまだ還らず・  
亘いなる空の涯て  
雲は燃え

星はかがやけど  
君はつひに還らず  
されど

故里に春はかへりぬ  
水溢るみ 鋸草萌ゆる  
あゝ その春のごとくに  
ちちははの胸にかへらむ  
さとびとの胸にかへりて  
はげしくも炎と燃えむ  
美まし國の護りとならむ

君は還りぬ

山 海 綱

村野四郎

杉葉のかげが砂にある  
洋杖がひかる

春の土

おまへは ここによこたはる

故三等兵曹

村野五郎之墓

長旗は雨にさらされて

剪花は散りて青く芽ぶく

ああ 海ゆきて

水漬きし屍

いま ここに

雲雀つり懸る 空の下

おまへは 土によこたはる

あつい薑の

花のかたわら

見えない炎に包まれて

安西は、満鉄入社後、二十四歳の時右膝関節炎の悪化から右脚切断の手術を受けてから詩活動を続け、一九三四年三十六歳の時に帰国して後、故郷の堺市の書記となり活動を続けた詩人で、堺芸術報国連盟書記長日本文学報告会詩部会の幹事でもありました。

佐伯は、早大仏文出身の詩人で、内務省警保局検閲課の検閲官でもあります。のちに内閣情報局第四部第一課に出向します。

滝口は、美術家としても活動し、前衛芸術の紹介啓蒙に大きく貢献した人です。シュルレアリズム思想が特高に危険視され、一九四一年に拘留、取調べを受け、起訴猶予中の作品です。

村野は、『体操詩集』（一九三六）で知られる新即物主義（ノイエ・ザハリヒカイト）の詩人で、またモダニズムの直系と自ら任じていた詩人です。理研コンツェルンの本部から派遣された理研電気株式会社の常務取締役であり、電気抵抗器など機密部品製造の陸軍造兵廠・海軍艦政本部・航空本部の共同管理工場の責任者でもあります。そしてモダニズム詩人として前記報国会の常任幹事として、三好達治らと名を連ねています。

さまざまな立場があり、さまざまな戦争への対処があり、さまざまな戦争詩があるわけです。

ところで、滝口が拘留された、同じ年の十二月八日がいわゆる大東亜戦争の開戦ですが、翌朝、信州浅間の詩人高橋玄一郎が治安維持法違反容疑で検挙されます。詩誌「リアン」による活動のためです。やがて戦地に在った同人竹中久七中尉は一九四二年河南省丘陽県から空路東京に送られ、軍法会議の後、長野警察へ、台湾で教職にあつた藤田三郎は一九四三年に松代警察で、それぞれ拘留取調べを受け起訴されます。特高資料のいう、リアン芸術共産党事件がそれです。竹中久七を中心とした。詩誌「リアン」のグループは、「詩と詩論」の詩人達とも対立しながら形式主義詩に発してシュルレアリズム詩運動を開拓し、ルイ・アラゴンやポール・エリュアル等の思想的転換と軌を一にしながら、独自な視点から科学的超現実主義を標榜して、主体的に自己の理論を対置させ、左翼文学運動解体期に、パルタイン距離を置いた異色の芸術運動を行なっています。記録をモンタージュした反ファシズム的思想詩の実験に注目すべき成果を挙げていますが、長篇などの特異な視覚的効果を狙った誌面構成のため、紹介出来ないのが残念です。「リアン」の独自の芸術運動については、いずれ『国語国文論集』誌上で詳細にふれるつもりで居ります。

### 撃滅の道に殺到せん

想へ、一國沖天の士氣

當年よくスラブの強大を擊碎せる。

今、民族の氣宇頻りに闊大にして

構想更に雄渾

大東亜水陸の廣袤を覆うて際涯なきは嘉し。

されど銃後の居當前線の庇蔭に駒れ

巷に峻嚴の色乏しく

人に敵愾の心の往年の如く昂らざるは何ぞ。

戰の様相日に荷烈を加へ咫尺これ死闘の場。

眼を掩はしむる鬼畜殘忍の狀を敢て正視すれば、

誰か忿懣渾身の激情なからざるべけんや。

而も東京進駐の僭冒を揚言して憚らざる、

今にして醜虜を之が根抵に粉碎せずんば何の顔あつてか勇士の忠烈に見ゆるを得ん。

時に三月十日

壯大極まりなき陸軍記念日の旦なり。

仍ち、奉天城頭當年<sup>あたたか</sup>の鐵風に駒して

徹底的米英撃滅の道に驚地殺到すべきのみ。

## 擊滅の賦

皇紀二千六百一年

ここ東亞のニ端

千古の鎧岩に藏はれし

聖なる島嶼 大八洲——

遂に神々の怒り爆発し

つんざく怒号は

雷電とともに天に冲しぬ

アジア十億の民よ

丘陵にのほり

荒磯に出でて

見よ 見よ

泡だつ太平洋のたゞ中に

暴虐と惡徳の牙城を

いま一大蘿音とともに崩れおちる

天空に軋り哭く

破れし妖鬼の翼

然鸞にくるふ

すさまじい魍魎の悲鳴を

祭る いまこそ

大いなる世紀の狼火はうも上げられたり  
ながき幽閉の扉つち摧かれたり

つづけ アジア十億の民よ

神の裔なる

大和民族の旗につけ

われらが神靈

また鷹等の上に在り

矛をとり 剣を抜け

雄叫び ござり立る

撃ち絶やせ

擊ち絶やすべし米英

われらが清きアジアの歴史

いまぞ暁らん

安西冬衛と村野四郎の詩です。前者は『現代詩昭和十八年秋季版』(博文館)一九四四年に、後者は、村野の第五詩集『故園の墓』(梧桐書院、一九四五)に収められたものです。

詩誌『VOU』の主宰者として知られたモダニスト詩人北園克衛と共同編集で16ページの詩誌『新詩論』(一九四二・一・一)九四三・十一を発刊した村野は、その誌上で「詩人たちが、みんな頭をそろへて國民詩を書いてゐる。いづれもみんな実直相な見慣れた頭だ。誰か新しいゼネレーションの中からかつてのあれ程純粹に帰依したエスプリ・ヌ・ボウをひつきで、ゼブラのやうな鮮明さで、飛びこんでくる新人はないものだらうか」(一九四三・三)と述懐した夫子自身が、このていたらくなのです。あの清新なモダニズム詩の旗手たる村野四郎が「立てよ、神の裔／今こそ妖魔撃滅の時！」挙り立て、剣を取り、神靈は天に在り』のようないわば『おらび詩』をもつて時代に和するのです。

井上光晴が「自分の中の戦争」を描いたとする『ガタルカル戦詩集』(一九五八)は、暗い時代の青春を生きる鬱屈した若者像を刻んだ小説で、「前線にて一勇士の詠へる」という副題をもつ吉田嘉七の詩集に感銘し合う文学好きの青年達を生き生きと描いています。まさしく越島のジャングルの幕喩の中で、読むべき本は上・下二冊の文庫本『万葉集』のみであり、昭和一四年に応召し、ノモンハン事件で戦争を体験してから詩を書きはじめたという、その吉田嘉七の詩は次のようなものです。

ある挺身の兵の語る

名も無き草を喰いつく、  
辺れる尾根や、断崖や、  
つもる朽葉にふみまよひ、  
幾度まろびし、つまづきし。

行き行けど、行方もわかな  
木の下闇の何時の日か

果つる日やある、昼ひそみ、

夜のみ歩む南溟の

ガダルカナルの森深し。

負ひ来し米はつきはて、

靴は破れぬ、趾裂けぬ。  
背囊遂に負ひきれず、  
装具もすべて捨てはてぬ。

抱くはわずか短剣と  
菊の御紋のつきし続。

泥にまみれつ、にじむ血に  
纏くべき布もなくなりぬ。  
血による蛆を追ふことも  
ものうくなりて、たふれ伏し  
幾度自決を想ひしか。

今日<sup>きの</sup>死<sup>死</sup>れんか、明日死<sup>死</sup>すか。

重き努めのなかりせば、  
つとに死にたる身なりけむ。  
死なむ命はやすけれど、  
奮ひたち生きてぞ行かむ。

心はいたくはやれども  
飢<sup>渇</sup>ゑは激しく、道はなく、  
創<sup>創</sup>は痛みて刺すごとく、  
遂にいつしか歯もかけて、  
眼は夜見えずなりにけり。

仆れし戦友<sup>ともい</sup>はいくたりぞ、

おのが身一つ、あるは這ひ、  
あるは辛くも歩みつつ、  
敵の背後をつきぬけて、  
迫り来りぬ、二十<sup>じゅう</sup>日<sup>じ</sup>。

はじめて見たる友軍の  
嬉しさにただ泣けるにや。  
否とよ、光見ざる眼に、  
あまりに強き砂浜の  
椰子の並樹を洩る光り。

### 破れたる鉄兜

—松本上等兵を悼む歌—

その瞳<sup>ひとみ</sup>の明るき色も、  
その逞しき肉ある肩も、  
ありありと眉にしるきに、  
破れたる鉄兜、今手にとりて  
呼ばへども君は帰らず、  
想ひ出は煙の如く、  
君と経し幾山河、

### 丘に立ちて —轉進の夕べに

苦しき日、樂しかりし夜、  
いづれをか、夢と定めん。  
よへはこれ、うつつなりしか。  
弾丸一つ、鉄兜深く貫き、  
轟きて君神去りぬ。  
凄じき戦なりしに、  
われ生きて君を想へば  
胸ふさぎ、溢るゝ涙。  
破れたる鉄兜手にとりてば  
その重み、苦しきまでに  
限りなし、湧きくる怒り。  
ここにして何を語らん。  
この想ひ天に通はず、  
君はよく國を護りてわれら勝たしめよ。

### 挽歌

我すらもかく悲しきに、  
母君は  
よくぞ散りしと  
のたまふべくも。

かの日大命を拜してこの島を攻め、  
こよひ大命を喪みてこの島を去る。  
ああ、われら勢ひ勢ひて  
闇の夜も敵機もものかは、  
攻め上りしこの片丘や  
耐へし日は幾日なりしづ。

彈丸なきに歎を食ひしはり、  
粗なきにたゆたひはせず、

攻め攻めて、遂に破らず、  
戦友あまたとこに葬りて

涙またまだ干ざるに、  
空しかる劍をいだきて、

この島を今去らんとす。

かの日大命を拜してこの島を攻め、  
こよひ大命を畏みてこの島を去る。

今何の私情あらん  
われらたゞ

命によりて生き、  
命により死す。

命により又ここを去る。

さあれ、この椰子の片丘、  
かぎりなき怒りを祕めて、

守るべし、戦友のみたまを。

いつの日か、かの日の如く  
再びぞわれら來りて、

日の御旗、ここに立つべし。

見よ、かなた、浪を蹴たてゝ、  
われら迎ふと船カヌは来りぬ。

いざさらば、ガダルカナルよ。  
眠りますあまたみたまよ

今は只、ひたに去るべし。  
この島を今は去るべし。

吉田嘉七は、一九四六年五月に復員しますが、この発表の当てもなく、辞世として遺書として書かれたこの詩篇には厳めしい漢字で鐵われた空虚な美辭は無く、ここには、行文や措辞の拙なさを超えた、「本当の詩」があります。専門詩人達の「おらび」合いからは生まれない眞実の表現が生きづいています。人が人を殺さねばならない殺し合わねばならない戦場の、非命の響きがあります。『ガダルカナル戦詩集』は戦争中は愛國、戦後は厭戦の面が強調されて読まることになりますが、「そのどちらでもない」、かつ「そのどちらであるところ」に「兵隊は生きていたし、死んで行った」という吉田の心情に触れた小説が古山高麗雄の「日本好戦詩集」(一九七九)です。

山路閑古は、戦後早く「愛国の徒」として「俳句に関しまックアーサー元帥に呈するの書」(『戦災記』昭21)を公けにして、戦争指導者の指揮に従って、戦争の具と化した俳壇を反省し、俳句の伝統が、民衆の手によって培われ、太平余徳として成長したことを強調し、弁明していますが、戦争にもつとも敏感に反応し、迎合したのは詩壇であり、詩人達だったのです。しかも、冒頭に述べましたような主知的方法論的自覚を鮮明にしていたモダニズム詩人達の多くが、己れの手法、己れの「詩法」、己れの「新詩論」を捨てて、無残なダミ声で空虚な戦争詩をうたい出すのです。「レエニンの月夜」(一九二九)で知られた近藤東は詩集『百万の祖国の兵』(無何有書房一九四四)の「後記」で「大東亜戦争を契機として、最も鮮明な転回を示した文化人は詩人」であり、「個人主義的悪徳の精算」をすべく、「詩人も制服を着る時が来たのである」とのべています。近藤は明大卒業後、鉄道省官吏として長く国鉄に勤めた詩人です。戦争末期に、大阪の湯川弘文社は安藤一郎『静かなる炎』村野四郎『珊瑚の鞭』竹中郁『龍骨』安西冬衛『大学の留守』近藤東『紙の薔薇』福原清『催眠歌』等、モダニズム詩人を含む、詩壇の中堅詩人の十七詩集をあつめて、  
へ新詩叢書として刊行しますが、その宣伝の謳い文句に「詩人のこのたびの大戦にいちはやく感應してその声を貌くせる、他の文芸分野にその比をみず。又その朗誦の氣運大いに世に起りて詩集の翹望せらるる今に優る時なし」と記しています。たいへん皮肉なことですが、戦争中詩壇は外面的に隆盛を極めるのです。経済的にも潤うのです。ほとんどの詩人が戦争詩を書いたからです。戦後公刊された安西冬衛の日記を通覧すると、そのことがよくわかります。しかもそこには、自己の詩法を捨てて、戦争謳歌の注文詩を書くことについての何のわだかまりも見出されません。安西冬衛と同じく大半のモダニズム詩人達が、こそって、厳めしい漢語や古語を多用した古い文体の詩を、へそをらびの詩々を、護身の呪文のごとくに合唱したのです。この最も鋭く感應した外面的な隆盛とはうらはらに、最も空疎な作品しか残せなかつたのも詩壇ではなかつたかと思います。それぞれの詩人にさまざまに戦争へ戦争に打ち込んだ詩人も少数ながら存在します。ただ、安西冬衛であれ、村野四郎であれ北園克衛であれ近藤東であれ、主要なモダニズム詩人達が、それぞれ定職を持ち、詩を生活の糧とせずに過ごし得たと思われる人達であつたと思うとき、少なくとも表現者として己れの詩法を曲げまいとする工夫と己れの表現を守ろうとする自負とを持ち

得なかったのがと私は思います。それは、金子光晴のような老猾な戦争詩たらざとも、己れをとりまく、さまざまな戦争の真実を己れの手法でとらえる工夫であり、あるいは、西脇順三郎のごとく筆を断つこととも時代への対処の仕方であつたでしょう。

流口修造は、献艦運動に和した前出の『辻詩集』に己れの詩があることを、座連悔み続けたことを詩人小説家である飯島耕一が伝えていました。

罪あるぬものの為罪の自責ありこの行く群衆の従順を見よ

近藤芳美的歌です。(『静かなる意志』白雲書房一九四九)

戦時にどう対処したかは、戦後をいかに出発するかという問題と深く関わっていきます。

明末清初の学者で、考証学を確立するとともに、愛國詩人としても知られ、清朝の異民族支配に生涯抵抗し続けた顧炎武という人の「正始」と題されたエッセイに「國を保つは、其の君其の臣、肉食者之れを謀る。天下を保つは、匹夫の賤辱、与かつて責め有るのみ」(保國者。其君其臣。肉食者謀之。保天下者。匹夫之職。與有責焉耳矣。)という言葉があります。肉食者は上層に在る者でしよう。

顧炎武はこの文のはじめで、「亡國」と「亡天下」の別について説いています。天子の姓・國号が改まるといった統治者だけの交代が亡國であり、邪説がはびこつて仁義が疎外された状況を亡天下と彼はいうのです。つまり國と天下を一緒にせず、國家を超えた、仁義が行われるべき人間世界、人と人との侵し合わない世の中にすること、「天下を亡ぼす」大事について、庶民は責任を負う。負うべきであるというのです。考証学の祖ともされている人の言を、己れの心情に引き寄せすぎた嫌いがありますが、天下を保つは匹夫も責めありとする言は私の心に重く響きます。

敗戦直後にへ億縄懲悔ハシメテということばが取り沙汰されました。為政者のいかの愚的臭氣から一般の反発を呼んだのですがへ懲悔ハシメテではなくへ責任ハシメテにおいて戦後を出発すべきであったというのが私の感概です。モダニズム詩人にかぎらず、表現者としての多くの文学者が、へ己れの戦争ハシメテを原点とせずに戦後を出発させたことの責任が問われることで、多くのすぐれた仕事を残した評論家の平野謙の戦後の出発の場合も、またプロレタリア詩人と目されている人達の場合とて同様なのです。

顧炎武の「正始」は三国時代の魏の齊王曹芳の年号から取られたものです。始まりを正す、あるいは正しく始めの意でしようが、「平成」と年号があらたまつて、戦争を知らない私の娘よりも一世代若い、この会場の多くのあなたがたと、なにがしか「昭和」という時代を共有し得た、同時代の人間としての御縁にあやかって、戦後に出来たべき責任のへ原点ハシメテ、天下を亡ぼす匹夫の責めについて言い及びましたが、ましてや國を亡ぼす、君子士臣の責任に於いてをや、というのが、かつての軍国少年の一員としての私の自然な気持です。表現者としての詩人においても、それは「文学的なアヤ」などではなく、人間としての生き方に関わる問題であり、その故にこそ、文学の問題でもあるのです。それはまたこれから「平成」を生きてゆく、あなたがたにも関わってゆく問題だろうと思うのです。

※この文は平成元年十一月十一日、学習院女子短期大学国語国文学会で行なった公開講演の主旨を骨子として筆を捕つたものであります。なお、この文の不備を多少とも補う内容をもつ小文「詩誌『Rien』の芸術運動」「新詩論」——戦時のモダニズム詩人たち」の一篇を『日本古書通信』(平成元年11月~2年2月)連載のコラムに書いています。参照願えれば幸甚です。